

# 近世演劇における四国遍路と巡礼

河合眞澄

四国遍路とは、巡礼の中でも四国八十八か所を廻る者にだけ用いられる呼称である。日本の近世演劇にはしばしば巡礼が登場し、四国遍路が登場する例も見られる。元禄四年（1691）九月には、京都の都万太夫座において、歌舞伎狂言（「狂言」は歌舞伎の演目をいう）「四国辺路」が上演された。「辺路」という文字遣いは当時の慣用であり、四国が辺土と考えられていた時代背景を反映している。

この「四国辺路」の上演資料として、絵入狂言本（挿絵入りの筋書本）が現存している。この絵入狂言本（以下、狂言本と略称）によって、芝居の中に描かれた四国遍路の様子がわかり、そこから四国遍路の実態を考察することができる。

狂言本「四国辺路」の冒頭には、「私存ましたもの 此夏より 四国をめぐり 初秋のじぶんに下向仕ましたが 四国へんろのじゅんれいが げんに利生をうけ きどくのござりましたをみて参り 則 名ところ書付帰りましたを 則三番続に取くみします」（以下、引用は近世文芸叢刊Ⅲ『翻刻絵入狂言本集 上』による）という条の含まれている座本山下半左衛門の口上が掲げられている。すなわち、四国遍路の身の上で起こった奇瑞の実話の見聞談にもとづき、「四国辺路」という三幕物の歌舞伎狂言を作ったというのである。しかも、その口上の後に「よう山下さま きつい入かな」と記されていることから、この芝居は大入りであったことがわかる。

「四国辺路」の第一幕冒頭の場面は、四国八十八か所の第一番札所である阿波国の霊山寺付近の路上が舞台となっている。この場面の梗概は、以下の通りである。

讃岐の浪人高松八郎左衛門は、妻子とともに四国遍路をしている。八郎左衛門親子があと少しで廻り終わるという時に、幼い女の子を連れて遍路の旅に出たばかりの女性と出会う。その女性おふさは、播磨の室の遊女屋の主人に捕まり、連れて行かれようとする。八郎左衛門が事情を聞くと、おふさは、闇討にされた夫の敵討のため、遊女屋に身売りをして旅費を作り、弟を敵討の旅に出したのだという。その後、遊女屋の主人に無断で四国遍路に出たため、追手がかかっていたのであった。おふさは泣く泣く遊女屋に戻る決心をする。一方、八郎左衛門はおふさの娘お長を養子にもらい受け、お長を連れてふたたび四国遍路をすることになる。

この場面から、当時の四国遍路に関わる種々の情報が得られる。以下、狂言本の本文に即して考察する。

- ① 八郎左衛門親子は「一ばんにれうぜんじ、れうぜんの しゃかのみまへにめぐりきて、万のつみもきへうせにけり」と巡礼歌を歌いながら登場し、おふさ親子も同様に「二ばんにはごくらくじ、ごくらくのみだのじやうどへゆくのは、なむあみだぶを 口くせにせよ」と歌いながら遍路をしている。その後、「三ばんはこんせんじ、こんせんのたからのいけと思へたゞ、こがねのいづみ たゝへぬるかな」と歌いながら双方が別れる。

当然ながら、遍路は札所にちなんだ巡礼歌を口ずさみながら旅を続ける。ここには、一番札所の霊山寺、二番札所の極楽寺、三番札所の金泉寺の歌が紹介されている。

- ② 八郎左衛門親子とおふさ親子がすれ違う時、おふさが八郎左衛門に錢一文を奉加すると、八郎左衛門は「ただ今両足文の心ざし。此世にては 火なん 水なん けんなんをのがれ。らいせは ごくらくじやうどへ生れん。なむへんぜうこんがう」と回向する。

すなわち、巡礼同士で、金銭的な余裕のある者が余裕のない者へ報謝することがあり、報謝された側は報謝した人に祝福のこぼを返すのである。このときのこぼには、定型があったものと思われる。

- ③ 八郎左衛門は、四国八十八か所の事情をよく知らないおふさに対して、「八十八か所を 皆めぐりますれば、道ののりが四百八十八里。川も四百八十八川。坂も四百八十八さかござる。たつしやなものは二ヶ月計にはめぐります」と教える。

ここからは、四国遍路の道程の厳しい状況と一巡に要するおよその期間がわかる。

- ④ 遊女屋の主人に連れ去られようとしているおふさを助けた八郎左衛門は、「四国へんろをするものは、たとへ見ずしらずのもの成共、たがひに見すてず やうすをき□とゞけ、とをれと有が こうぼう大しよりの をきてゝござる」(引用者注——□は虫損等により解読不能の文字)と言う。

これは四国遍路をする者の基本的な心得であり、遍路はつねに相互扶助の精神で助け合い、八十八か所を廻る旅を全うすることを企図していたものである。

- ⑤ おふさは、無断で遊女屋を抜け出して四国遍路に出た理由を、「何とぞ四国へんろをいたし、一つはつまのごしやうのため、又敵をも討取ねがひのためと存、かき置をして出ました」と語る。

このことばから、亡き人の菩提を弔う、あるいは願いごとの成就を祈るといった四国遍路の目的の一端を窺い知ることができる。苦しい遍路の旅に出るにあたっては、各人が止むに止まれぬ事情を抱え、覚悟したものであろう。

- ⑥ 遊女屋に戻る決心をしたおふさが、娘お長に遍路をさせたいと言うと、八郎左衛門は「身共らは大かためぐりたれ共、此子をつれて 又今一どめぐりなをさふ」と言って、おふさの依頼を聞き届ける。

つまり、一巡した後にも、さらに遍路を重ねることがあったという例である。実際に二巡以上遍路を重ねた者も多かったようである。

これらは、実話にもとづいたという前記の口上から判断して、事実にきわめて近い四国遍路の様態を表しているものと考えられる。

次に、「四国辺路」第二幕最後の場面では、遍路にまつわる奇跡譚が語られる。この場面では、讃岐に戻っている八郎左衛門とお長が毒殺されるが、死んだはずの八郎左衛門は生きていて、「四国へんろのおひづる、ずんずんにきれ ちにそま」っている。八郎左衛門は、「扱はおひづるが 某が命にかはり給ふか」と悟り、「かゝるきどくの有からは、お長も つれて へんろをさせた子じや、いきの出ることも有ふ」と考え、その通りにお長は息を吹き返す。

「おひづる(笈摺)」は遍路が必ず身につける着衣であり、巡礼の制服ともいべき品である。笈摺がずたずたになっていたことは、奇特の現れであり、四国遍路の利生を示している。

さらに、この場面は「四国へんろの御きずいこそありがたけれ」という一文で締めくくられ、四国遍路が靈験あらたかなものであることを主張している。

第三幕最後の場面では、伊予の国主が四国遍路をしている時に、百姓の作介夫婦がやってきて、「四国へんろ十五はんめ ゑんみやうじのもんぜん成 夕がほ村の作介と申ものにて候。寺にちうじなく候間、すへて下さるべし」と願い出る。すなわち、十五番札所(正しくは五十三番札所)の円明

寺が無住になっているため、住持に任命してほしいという願いである。国主は、「其寺の義は さと のものが出家に成て すはるれいでないか」と問い返す。作介が「されば寺はそこねまする 地行は なし、すはるものなく候」と答え、荒れ寺で知行も与えられていないため、住持のなり手がいないことを告げる。すると国主は、「しからば 寺もこんりうして 地行も三百石付てとらせふ」と応じ、寺を建て直し、知行を与えることを約する。

これは、当時八十八か所の札所の内には廢寺同然の状態のものがあったことや、その寺近辺から住持を求める場合があったことを示している。また、時には領主が再興に尽力することもあったものと思われる。

この後、八郎左衛門たちはおふさの夫の敵を討ち取る。浪人していた八郎左衛門は、国主に召し抱えられることになる。その時、おふさがお長を連れて出て、「此子はへんろのきどくにて 二たび命 たすかり候。父もなきものなれば 出家になし、ゑんみやうじへ すへ下さるべし」と国主に願う。お長は四国遍路の利生によって命を救われた子であり、すでに父を亡くしているので、尼として円明寺の住持にしてほしいという願いである。この願いは、国主によって無事に聞き届けられる。

ここからは、札所の寺の中には尼寺もあったことが窺える。領主の直接の命によって住持を決定することもあったようである。

以上のように、狂言本「四国辺路」には、四国遍路の実際のありさまがさまざま残されており、幾分かは芝居としての潤色を割り引いて見なければならぬにせよ、四国遍路に関する貴重な情報を提供してくれているのである。